

マーキスの「我々と同じ将来」の 議論に対する批判

京都女子大学

江口聡

eguchi@kyoto-wu.ac.jp

マーキスの反中絶の議論

- Future-like-ours説、以下FLO説。
 - Don Marquis, “Why Abortion is Immoral”, *The Journal of Philosophy*, vol.86, 1989.
1. 人間の成人を殺すことが不正なのは、その成人から価値ある将来を奪うからである。
 2. 受精卵や胎児もわれわれと同じ価値ある将来をもっている。
 3. それゆえ、胎児を殺すことは成人を殺すこととまったく同じだけ不正である。

主張される長所(1)

- 世俗的。自然主義的。特殊な形而上学的前提に訴えない。しばしば “the best secular argument against abortion” とされる。
- 種差別的でない。→われわれと同じような価値ある将来をもつ動物や異星人もカウント。
- 「ひと」(person)概念に訴えない。われわれと同じ価値ある将来をもつ有機体が重要。
- 「潜在的な権利」の概念に訴えない。

主張される長所(2)

- 人を死なせるのがなぜ不正なのかについて、欲求説よりも強力な「価値ある将来」の剥奪説。
- 特に昏睡状態にある人を死なせること、うつ状態にあり死を望んでいる青年を死なせることの二つのケースがどちらも不正であることを説明できる。(マーキスは欲求説では説明が難しいと主張)

FLO説に対する反駁のオプション

- 女性の視点、女性の権利の軽視。(Cudd 1990)
- 避妊も同程度に不正になる。(Norcross 1990)
- 「喪失」lossを二義的に用いている。(Sinnott-Armstrong 1997)
- 「われわれ」と同じ「価値ある」将来はもっていない。(McMahan 1999, 2002; Brown 2000; Boonin 2003)
- 欲求説の優位 (Boonin 2003)

女性の視点の軽視

- たとえばCuddはマーキスが胎児の道徳的地位に注目しすぎ、胎児の権利を絶対視していると批判。
- 多くのフェミニスト哲学者が従来から主張していたポイント。
- たしかに妊娠している女性の権利はしっかり考慮すべき。

検討

- たしかに「女性の視点」は重要。
- しかし、胎児の道徳的地位の問題を解決せずに女性の権利のみを主張するわけにはいかない。胎児の権利より女性の選択権が優先するかどうかの問題であるので、論点先取になる。
- やはり胎児の道徳的地位の問題を避けるわけにはいかない。

避妊も問題？

- Norcrossの批判: 避妊も卵子や精子から将来を奪うことになるのだから、同様に不正であることになる。
- マーキスの答: 卵子や精子はそれ自体ではまだ我々と同じ将来をもっていない。我々と同じ将来をもつようになるのは受精し成長可能な有機体となってから。

検討

- それではシャーレで卵子と精子を受精させたら、その有機体から将来を奪うことになるか？
- マーキスの答は不十分に見えるが、古くからある蓋然性の程度の違いに訴える議論を援用できるかもしれない。
- 精子や卵子と、受精卵では将来成人になる蓋然性が大きく違い、これが道徳判断に影響する。道徳判断は本質的に蓋然性にかかわる判断である。(Noonan 1970)

「喪失」「剥奪」の二義性

- Sinnott-Armstrong (1997)
- 「喪失」loss 「失なう」loseの二義性。
- Ex. AとBがカーレースをして、Aが勝つ。Bは優勝トロフィーなどを「失なった」が、Aは道徳的に不正なことはしていない。
- 道徳的に中立的な意味で「失なう」ことと、道徳的に不正な意味で「失なう」ことは区別するべき。

「喪失」「剥奪」の二義性(2)

- 「成人を殺すのが不正なのは価値ある将来を奪うからだ」の「奪う」は道徳的な意味で用いられている。
- もともと道徳的な権利をもっているものを剥奪するのは不正だが、権利をもっていないものを失なうことは道徳的に中立。
- マーキスの議論での「中絶によって胎児は我々と同じような将来を失なう」の「失なう」は中立的な意味。
- 中絶が不道徳であるとされるのは、胎児が我々と同じような将来をもつ道徳的権利をもっている場合のみ。
- しかしこれはマーキスの議論では立証されていない。

検討

- FLO説が「奪う」「失なう」といった語句の否定的な印象を利用しているのは確か。
- しかし、胎児がわれわれと同じように価値ある将来をもっていることを認めてしまうならば、やはり胎児から将来を奪うことは我々から将来を奪うことと同様に不正に思われる。

胎児と「ひと」の同一性

- McInerney (1990)。
- 胎児は心的活動を行なっておらず、「ひと」の同一性(personal identity)の基準を満たしていない。つまり、胎児がもっているとされる将来は、その胎児が成長した結果生じる「ひと」の将来とは同じものではない。

我々はいつから我々か

- McMahan (2003)
- 「私」(≠「ひと」)の本質は身体ではなく意識。
- したがって「私」のはじまりは私がいる有機体が意識をもちはじめから。

検討

- マーキスの議論そのものは「ひと」の概念には訴えていない。
- また、胎児がのちの「ひと」と同一の存在であることも仮定していない。
- とにかく当の有機体（あるいは存在者entity）がなんらかの価値ある将来をもっていれば議論は成立する。

「価値ある」将来

- マーキスの議論では「価値ある of value」ということがどういうことであるかは意図的に触れられない。主観的な価値か、客観的な価値か。→ マーキス自身は客観的なものを想定。
- しかしおそらく「価値」よりも「欲求」や利益 interestの方がより基本的な概念。(まったく主観を離れたという意味での)「客観的な価値」の概念は難解。

将来の価値

- 「価値ある将来」と言われる場合の将来の価値は、基本的にそのひと(あるいは有機体)にとっての価値であるはず。
- 将来の価値はおそらくわれわれが意識によって投影しているもの。(メタ倫理学上の表出主義／疑似实在論)
- 当人にとっての価値は、当人の意識状態やライフプロジェクトといったものに影響される。
- したがって、まだ感覚をもたない細胞や胎児には、まだ、われわれと同じ価値ある将来はない。

殺人の悪さについての欲求説

- 以上の立場をとれば、マーキスに反して殺人の悪さについての欲求説をとることになる。
- 成人を殺すことが悪いのは、そのひとの生きつづけたいという欲求に反するから、という説明の方がストレート。
- (1)昏睡状態のケースと(2)うつ病で死を望む青年のケースが問題。
- どちらのケースでもその当人は生きつづけたいという欲求を失なっているが、殺すことは不正に思われる。

昏睡状態(1)

- 昏睡している人を殺すのが不正なのはなぜか。マーキスは欲求説ではこの問いに答えられないと考える。
- しかし、われわれの重要な欲求のほとんどは傾向的欲求(dispositional desire)。われわれは通常「生きたい」と意識的に欲求しているわけではなく、傾向としてそうした欲求をもつにすぎない。

昏睡状態(2)

- 傾向的欲求は、質問されたときの理想的な答。
- われわれのほとんどは現に「生き続けたい」と欲求しているわけではないが、「生き続けたいですか？」とたずねられれば「イエス」と答える。
- 同様に昏睡状態にある人も、もし意識があれば「イエス」と答えるであろうと言えるのであれば、傾向的欲求として生き続ける欲求をもっていると言える。
- したがって、欲求説でも昏睡状態の人を死なせることの不正さは説明できる。

死を望む青年(1)

- うつ状態で死を望む青年を死なせるのが不正なのはなぜか。
- そうした欲求は一般に一時的なものであるから、そうした欲求を満たすことに価値がないことは自明。

死を望む青年(2)

- 加えて目的—手段関係に注目。誰かが自分の死を望む場合、死そのものではなく(通常は)苦痛や苦悩からの解放を望んでおり、死は狭い視野に見えた手段にすぎないように思われる。
- おそらくそうした手段として死を欲求することは合理的ではない場合が大半。
- 合理的な欲求＝事実と論理によって最大限の批判にさらされた場合の欲求が重要。(Brandt 1977; Hare 1981; Griffin 1988)

欲求説でもいける ただしその条件は

- 「価値」を当人の欲求と切り離すことは奇妙なので、欲求説の方が整合的である。
- 欲求説によって考慮されるべき欲求は、傾向的欲求であり、さらにそれはwell-informedでrationalな欲求であると言えれば欲求説は「価値ある将来」説と同じくらいうまくゆく。
- ただし上の条件を正当化するのはまだ難しい問題が残っている。

結論

- 人を死なせることの不正さについて欲求説がとれるのであれば、まだ欲求をもたない胎児を死なせることは（他の条件が同じであれば）それほど悪いことではないと言えそう。
- もちろん胎児を死なせることが不正である理由は他にさまざま存在するので、道徳的問題がないわけではないが、マーキスの議論ほど強い非難は必然ではない。

参考文献

- Beauchamp, Tom L. and LeRoy Walters eds. (1989) *Contemporary Issues in Bioethics*, Wadworth, 3rd edition.
- Boonin, David (2003) *A Defense of Abortion*, Cambridge University Press.
- Boonin, David and Graham Odie eds. (2005) *What's Wrong?: Applied Ethicists and Their Critics*, Oxford University Press.
- Brandt, R.B. (1979) *A theory of the good and the right*, Clarendon Press.
- Brown, Mark T. (2000) "The Morality of Abortion and the Deprivation of Futures," *Journal of Medical Ethics*, Vol. 26.
- (2002) "A Future Like Ours Revisited," *Journal of Medical Ethics*, Vol. 28, No. 3.
- Card, Robert F. (2006) "Two Puzzles for Marquis's Conservative View on Abortion," *Bioethics*, Vol. 20, No. 5.
- Cudd, Ann E. (1990) "Sensationalized Philosophy: A Reply to Marquis's "Why Abortion is Immoral";" *The Journal of Philosophy*, Vol. 87, No. 5, pp. 262–264.
- DeGrazia, David (2003) "Identity, Killing, and the Boundaries of Our Existence," *Philosophy & Public Affairs*, Vol. 31, No. 4.
- Griffin, James (1988) *Well-Being: Its Meaning, Measurement, and Moral Importance*, Oxford University Press.
- Hare, R. M. (1981) *Moral Thinking*, Oxford University Press. (R. M. ヘア, 『道徳的に考えること：レベル・方法・要点』, 内井惣七・山内友三郎監訳, 勁草書房, 1994) .
- Korcz, Keith Allen (2002) "Two Moral Strategies Regarding Abortion," *Journal of Social Philosophy*, Vol. 33, No. 4.
- LaFollette, Hugh ed. (2002) *Ethics in Practice: An Anthology*, Blackwell, 2nd edition.
- Marquis, Don (1989) "Why Abortion Is Immoral," *The Journal of Philosophy*, Vol. 86, No. 4. Reprinted in Satris (2004).
- (1997) "An Argument that Abortion is Wrong," in Hugh LaFollette ed. *Ethics in Practice*, Blackwell. Also in LaFollette (2002).
- (2001) "Deprivations, Futures and the Wrongness of Killing," *Journal of Medical Ethics*, Vol. 27.
- (2006) "Abortion and the Beginning and End of Human Life," *Journal of Law, Medicine & Ethics*, Vol. 34.
- McInerney, Peter K. (1990) "Does a Fetus Already Have a Future-Like-Ours?" *Journal of Philosophy*, Vol. 87, No. 5. Reprinted in Boonin and Odie (2005).
- McMahan, Jeff (1999) "Cloning, Killing, and Identity," *Journal of Medical Ethics*, Vol. 25, No. 2.
- (2002) *The Ethics of Killing: Problems at the Margins of Life*, Oxford University Press.
- Noonan, John T., Jr. (1970) "An Almost Absolute Value in History," in *The Morality of Abortion: Legal and Historical Perspectives*, Harvard University Press. Reprinted in Beauchamp and Walters (1989).
- Norcross, Alastair (1990) "Killing, Abortion, and Contraception: A Reply to Marquis," *Journal of Philosophy*, Vol. 87, No. 5. Reprinted in Boonin and Odie (2005).
- Paske, Gerald H. (1998) "Abortion and the Neo-Natal Right to Life: A Critique of Marquis's Futurist Argument," in *The Abortion Controversy*, 2nd edition.
- Reiman, Jeffrey H. (2001) "Asymmetric Value and Abortion, with a Reply to Don Marquis," in Robert M. Baird and Stuart E. Rosenbaum eds. *Ethics of Abortion*, Prometheus Books, 3rd edition.
- Satris, Stephen ed. (2004) *Taking Sides: Clashing Views on Controversial Moral Issues*, McGraw-Hill, 9th edition.
- Savulescu, J. (2002) "Abortion, Embryo Destruction and the Future of Value Argument," *Journal of Medical Ethics*, Vol. 28.
- Sinnott-Armstrong, Walter (1997) "You Can't Lose What you Ain't Never Had: A Reply to Marquis on Abortion," *Philosophical Studies*, Vol. 96.
- Steinbock, Bonnie (2006) "The Morality of Killing Human Embryos," *Journal of Law, Medicine & Ethics*, Vol. 34.